

2023年『資本論』深掘り講座(第12回)ニュース

—第3巻の真価を探る—

前回の講義内容

■ワンポイント—岩井克人氏の俗流「貨幣自己循環論」

岩井克人氏は、ことしの文化勲章の受賞者となっていますが、氏の「貨幣自己循環論」はマルクスの価値形態論の誤解・曲解にもとづく俗流貨幣理論にすぎません。氏は全体的な価値形態Bと一般的な価値形態Cとのあいだに循環論法が成立するとしています。右辺の一商品(リンネル)が一般的等価物になることにより、その他のすべての商品が左辺で社会的一般的な相対的価値形態になることができるのです。これは商品世界の共同事業で成立することになりなす。このような商品発生史の転換点、飛躍を見逃しているのです。また貨幣を価値論から切り離してしまい記号と同一視することにより観念的貨幣理論に転落しています。「朝日新聞」(2019. 8. 15)も貨幣の本質が理解できない。

■銀行券の本質と株式会社の歴史的意義

ポンド紙幣と旧国立銀行券に印字されている、支払約束文言は何を意味するのか。(「日経新聞」(2009. 7. 21)はその本質を解明することができない。)金との兌換を前提にした文言ですが、銀行券そのものは、貨幣の支払手段を前提にした信用貨幣がその起源をもちます。商品の売買と貨幣決済の間には時間的ズレが生じます。(掛売り掛買い)この債権債務関係を担保するのが手形であり銀行券だったのです。(信用制度)そのご国家信用を背景に一般的に紙幣としての機能をはたすこととなります。しかし金との兌換が停止されることにより紙幣価値は減価しインフレを止めることは出来ません。

株式会社は一社数社による独占企業が登場してくると、もはや私的所有とは相いれない状態、社会的企業と社会的所有に転化せざるをえません。これは資本主義的生産様式を止揚して未来社会に橋渡しをする歴史的通過点にはかなりません。その一方で株主(資本所有)と機能資本家との間の詐欺とペテンによるだまし合いが横行することも見逃してはなりません。

「私的所有の統制を欠く私的生産」(資本の腐朽性)と述べています。(第27章/原454)

本日の学習 第6篇「超過利潤の地代への転化」

時間割

講義Ⅰ 13:00~14:00 (60分) (休憩10分)

講義Ⅱ 14:10~15:00 (50分) (休憩10分)

講義Ⅲ 15:10~16:00 (50分) (休憩10分)

修了式 16:10~16:55 (45分) 受講生の感想、意見、次期講座への要望等。皆勤者の表彰

片付け終了 16:55~17:00

■終了後の質問感想についてはメールでお願いします。 mitioT@outlook.jp

ご案内

『資本論』第一巻講座第4回

■本講座 12月17日(日)開講 13:00~17:00 ■会場:エデュカス東京

■講師 村上 裕先生 ■内容:第4章「貨幣の資本への転化」

「Das kapital を読む会」

■12月23日(土) 13:00~17:00 ■会場:東京駅八重洲倶楽部第7会議室

■内容 第2巻 序言および「資本循環論」 ■講師 宮川 彰先生

■本日の講義で本年度の講義は修了となります。大変お疲れさまでした。宮川先生に感謝申し上げますとともに、次回の「深掘り講座」にも是非ともご参加ください。

以上